

令和7年度 丸亀市産業振興推進会議 観光戦略プラン策定部会（第2回） （会議録）	
日 時	令和8年1月9日（金）午後1時30分～午後3時40分
場 所	丸亀市役所2階 201会議室
	（丸亀市産業振興推進会議観光戦略プラン策定部会 委員）10名中、8名出席 小山部会長、杉尾委員、筒井委員、西川委員、馬場委員、藤井委員、松永委員、 真鍋委員、（五十音順）
	（丸亀市産業生活部 産業観光課） 徳田課長、逢坂副課長、本田観光交流担当長、宮竹主任、三附主事 （株式会社ジャパンインターナショナル総合研究所） 四国支社長 玉井氏、四国支社研究員 中村氏
欠席者	内海委員、川田委員（五十音順）
議 題	1. 開会 （1）開会あいさつ （2）出席者の紹介 （3）部会長あいさつ 2. 議事 （1）第二次丸亀市観光戦略プラン（素案）説明 3. その他 4. 閉会
会 議 の 概 要	
開会 （1）開会あいさつ 丸亀市産業観光課 徳田課長より挨拶 （2）出席者の紹介 （3）部会長あいさつ 小山部会長より挨拶 2. 議事 （1）第二次丸亀市観光戦略プラン（素案）説明	

(事務局)

前回からの修正点および記載内容について説明

(西川委員)

12 ページと 19 ページに記載されている数値について確認したい。12 ページでは、「1 人あたり旅行消費額（宿泊あり）」について、令和 6 年度の実績値が約 38,000 円、目標値が約 18,000 円と示されている。一方で、19 ページの成果指標では、令和 12 年度の目標値が 45,000 円となっている。この両者の数値には大きな乖離が見受けられるが、その差はどのような考え方に基づくものなのか。令和 7 年度の 18,000 円から令和 12 年度に 45,000 円まで引き上げることは、かなり高いハードルであるように感じられるが、目標設定の整合性についてどのように整理しているのかを確認したい。

(事務局)

12 ページと 19 ページに記載されている数値の違いについて説明する。12 ページは、現行計画の振り返りという位置づけで整理しており、当時の基準値は令和元年度の数値を用いている。その後、物価高騰などを経たことで、令和 6 年度時点では、当初設定していた目標値との間に乖離が生じている状況にある。

一方、19 ページに示している数値は、令和 6 年度の実績値を踏まえたうえで、令和 12 年度に向けて目指す水準として設定したものであるため、両ページの数値に差が生じている。こうした点が誤解を招かないよう、12 ページについては注釈を付すなど、表現の修正を行う予定である。

(松永委員)

20 ページなど、戦略方針のところに掲載されているマークの意味を確認したい。なお、表示が小さくて数字を判別しがたい。

(事務局)

SDGs という考え方における 17 個の番号について、該当する番号を掲載している。現状、アイコン等が小さく見えにくいいため、数字の判別等できるよう、マークを大きく掲載できる説明のページを設けて対応する。

(松永委員)

4 ページ「他計画との関連」について、変更の可能性を示唆されたが、その詳細について説明を求める。

(事務局)

前回の部会で、「総合計画や産業振興計画と本計画の計画期間がずれていることから、本計画の目標値や施策、方向性が変更になるのではないか」とご発言いただいた。計画期間内に変更の必要が生じた場合は、毎年2回は開催している丸亀市産業振興推進会等で適宜議論をさせていただきたい。この旨を説明した。

(小山部会長)

4ページ 修正の必要性が生じた際は新たに審議できるとする項目を、該当箇所に一文加えていただきたい。戦略プランは長期で運用していくものであり、昨今の情勢不安を踏まえると、修正等を加えるべき時期が来ると思われる。その際は振興推進会議等の意見・提言を踏まえ、必要に応じて計画の見直しを行う旨していただきたい。策定後に継続的にモニタリングを行うことを提案する。

(杉尾委員)

12ページ「市を訪れた観光客数」令和元年度294.5万人と、7ページ「観光入込客数の推移」令和元年度の294万人の整合性は取れている。一方で、12ページ「延べ宿泊者数」令和元年度49.4万人と、8ページ「市内宿泊者数の推移」令和元年度約16.3万人は乖離しているが、問題ないか。

(事務局)

19ページ「延べ宿泊者数」は、丸亀市観光協会が市内11施設から毎月の総数を集計した数字である。一方で、8ページ「市内宿泊者数の推移」は、商工会議所による4～5施設の集計である。商工会議所の集計は、県内客数・県外客数・外国人客数の内訳を古くから網羅しているため使用している。観光協会では外国人観光客数を把握できないため、データ元が異なり複雑ではあるものの、商工会議所のデータを提示している。

(杉尾委員)

商工会議所の集計は、市内の宿泊事業者をいくつかピックアップしているため、全てを網羅しているとはいえない。データの違いを明記してはどうか。

(西川委員)

19ページに「観光協会調べ」といったデータ元を明記すれば、数字の乖離に説明がつく。

(事務局)

そのようにデータ元を明記する。

(杉尾委員)

そもそもコロナ禍の数字を基準にするのはおかしい。コロナ明けを基準にするべきだと考える。

(事務局)

指摘のとおり、コロナ禍と比較しても意味がない。あくまでも国内旅行市場の推移として、市内消費額等の上昇傾向を提示するために掲載している。とはいえ、コロナ禍である旨の注釈を追記する。

(小山部会長)

コロナ禍は令和2年の2月からであり、令和元年、2019年には重なっていない。それにもかかわらず、令和6年実績値が令和元年基準値を大幅に上回っている背景を知りたい。

(事務局)

12ページに説明を掲載しているが、物価・宿泊料の高騰、円安によるインバウンド観光客の増加、コロナ禍後の旅行需要の回復などの複合的要因が考えられる。

なお、令和元年度は令和2年3月までを指すため、約2か月はコロナの影響を受けている。特に春先、3月頃は旅行客が多い。また、「一人あたり旅行消費額」はかなり少ないように見受けられる。コロナ禍に関係なく、単純に低かったものが今は上昇していると考え。令和3年の前期プランのデータをそのまま掲載しており、表がわかりにくいため対応する。

(藤井委員)

そもそも令和7年度を掲載する必要はあるのか。

(事務局)

第1次プランの策定時、基準値を令和元年に設定し、それに基づき令和7年の数値目標を決めた。現時点の実績を、前期プランの評価として掲載している。

(藤井委員)

19ページ掲載の成果指標「JSTS-D 自己評価スコア」について、馴染みがなく、水準の検討がつかない。400点満点であることや全国平均点等の補足を提案する。

(事務局)

基準値 81 ポイントは、観光庁が推奨する「STARs」というアプリを使った診断結果であり、100 点満点でのスコアである。この旨の注釈を追記する。なお、全国平均スコアは把握していないが、80 点は極めて高い。用語集の説明を修正し、補足していく。

(藤井委員)

戦略方針 1 で記載もある飯野山は、見慣れていない人にとっては印象的な形であり、歴史もある。よりクローズアップしてプランに取り上げてでもいいのではないか。

(筒井委員)

掲載はされているので十分ではないか。詳細まで言及すると、全てに取り組む必要が出てくる。

(藤井委員)

詳細は必要ないが、丸亀城や島については記述があるため、同様の扱いを求めたい。

(事務局)

1 ページに丸亀市の顔になるものの写真を数点掲載しており、その中に飯野山を選出している。文言の追加は難しい可能性がある。写真の差し替え等を含め、対応を検討する。

(真鍋委員)

28 ページ「第 7 章 戦略の推進にあたって」の「(1) 四者による連携」について、より踏み込んだ形で提案できないか。県であれば、観光事業で外部受付のコンペがあり、業務委託やイベントの請負を行っている。特に丸亀市は、レオマをはじめ民間事業者が表に出ている。民間の観光関連事業者と市民、行政、DMO の連携、PPP の提案を期待する。提案によって、まちづくりや観光に携わる民間団体の方々の参画の可能性が見える。

(事務局)

計画を推進するにあたって、事業者の役割は非常に大きいと感じている。ピックアップされている記述としては、事業者と行政をつなぐ役割は、観光協会の DMO がキーマンとなっている。観光関連事業者との連携は各戦略方針、各施策に必須であり、それぞれに盛り込んでいると考えている。

(真鍋委員)

指定管理や業務委託等の様々な形があるが、概ね丸亀観光協会が担っている。その部分について、民間事業者が積極的にコンペに参加し、参画を得られると可能性が広がる。

民間と連携して何ができるのか、具体的に記されることを期待する。

(小山部会長)

28 ページの役割の下に、「地元事業者が活躍できる場の創出」といった項目を設けてはどうか。そこで「様々な可能性を検討し、より良い施策の実施に努める」とすることで、施策の柔軟性、可能性が広がると考える。

(事務局)

JSTS-D のガイドラインの最重要点に重なる、貴重な意見だ。「観光客が多く訪れたとして、本当に地域の経済が回っているのか」が最大のテーマである。指定管理業者が県外の業者であれば、県外にお金が流れていく。丸亀の人が丸亀の観光で稼ぐ必要がある。これは記述すべきテーマだ。ただ、観光に限らず重要な問題であり、上位計画にあたる産業振興計画で取り組むべき部分でもあると考える。PPP を含めた取組の記述について改めて協議を行い、検討する。

「行政の役割」の中に、提案いただいた「地元事業者が活躍できる場の提供」といった文言を追加して対応したい。

(小山部会長)

地域内経済循環、地域の事業者が活躍できる場の提供は、最も重要な観光戦略の基本であり、外せないものと考えている。

(松永委員)

19 ページに「丸亀セレクション」認定数が挙げられている。うちわや農産品が選定されているが、それらの観光物産の取り上げ方は、計画書内で項目に挙げないのか。

(事務局)

25 ページ戦略方針 5-3 で「地域製品のブランド化と観光消費の循環促進」を挙げている。地域ブランドの創出が観光客の呼び込みや土産品の購買につながり、それが一つの観光であり、地域内経済循環に結びつくと考えている。

昨年度にブランド認定部会を立ち上げ、セレクションの制度が始まった。昨年度から今年度にかけて認定品が増え、PR が展開され始めたところだ。来年度の丸亀ブランドに特化した物産販売や、観光協会と連携したセレクションの展開について計画に記載しており、重点的に取り組んでいく。

(小山部会長)

地域製品の開発までは踏み込まないのか。

(松永委員)

観光において食の問題は重要であり、食、物産は観光に大きなつながりがある。せっかく認定をしているのだから、より PR してもいいと考える。

(筒井委員)

丸亀セレクションの認定を受けた事業者側のメリットが課題になる。認定を受けても、現状はただ認定を受けただけになっているのではないか。認定を受けて東京で販売されても、小部数しか売れないのであれば、新たに認定を受けようとする事業者は出てこない。観光につなげる部分も含め、PR、販促について各部署で考える必要がある。

(松永委員)

展開やホームページ掲載のため、ブランドへの登録を希望する人がいる。本計画に取り上げるかどうかにかかわらず、ブランドにセレクションの扱いを入れてはどうか。現在は認定数しか掲載されていない。返礼品に利用されるのも、丸亀として認められたものだ。ブランドに認定され、そういったものに利用されることにメリットを感じ、申請する人もいる。

(西川委員)

セレクション認定品には、市や JA の推したい製品と、市の製品を使って展開するものがあり、ジャンルが異なる。一括りで考えるのは荒っぽいと感じる。ジャンルを分けて整理するようにしなければ、40 品目でも 400 品目でも認定品が出てきて、セレクションの価値が軽くなる。そのあたりを考慮するべきではないか。

(小山部会長)

セレクションの数が集まるにつれ、必然的にカテゴライズが求められる。そのカテゴライズに応じて販促方法も変わる。

認定が一定数に達すると、次は認定数でなく、売上実績を数値目標にした検証が必要になるのではないか。それは選定部会の役割になると思われる。現在の運用は塩漬け状態に思われるので、検証を積み重ねながら、付加価値の高いものの選定が求められると考える。

(事務局)

成果指標の認定数については、現段階ではこの項目しか適切なものがない。ただ、認定数の増加に伴い価値が薄まる懸念や、事業者にメリットがなく、初年度から 2 年度にか

けて申請件数が減少している実情もある。それでも、事業者がメリットを感じ、ブランド化を目指そうとすることが一つの目標だと考えている。そのため、認定数を成果指標に入れた。

認定数が増加しなければ販路拡大が難しい。制度の見直しや認定品のカテゴライズ、その展開は、ブランド認定数のK P I 達成に必要な動きだと考える。ブランド認定部会と相談しながら取り組みたい。

計画では、25 ページ 5-3「地域産品のブランド化と観光消費の循環促進」に記述している。ブランド認定制度そのものの課題は認識しているため、この計画における記載はいただいた意見を踏まえて検討する。

(西川委員)

数字は問題でない。認定部会の中でベースの話を詰めておき、方向性を決めてからでないといと十人十色の意見が出る。責任のある数字が出せないのではないか。こういったカテゴライズにするかなど、方向性を定めるべきだったと考える。

(松永委員)

今の話に関連してだが、一昨年に立ち上げたブランドの選定について、当時どのような位置付けだったのか、正直なところ記憶がはっきりしていない。

観光産業振興計画の中で、我々としてどう位置付けていたのかという点である。今回の資料を見る限り、この内容はほとんど入っていない。一方で、4 ページの評価報告の中には、ブランドセレクションに触れた記載がある。

そうすると、この取組が計画上どう整理されているのか、説明があった方がよいのではないかと感じる。

(事務局)

ブランド制度については、令和 6 年度に始まった制度であり、産業振興計画は令和 5 年度からの計画であるため、計画に記載されているわけではない。ただし、地域ブランドの創出は、産業振興における一つの重要な方向性として位置付けられており、産業振興計画の中では考え方として記載されている。

(松永委員)

横のつながりは一応あるという理解でよいか。それであれば構わない。

今回、観光戦略プランを練り直すのであれば、その間に立ち上がったブランドセレクションについても、どこかで触れることができるのではないかと思った。線を入れるかどうかは別として、整理できればよい。

(西川委員)

総合計画の中で、例えば産業振興計画があつて、そこから枝分かれするように様々な取組が出てくると思うが、その関係性がもう少し見える形になっていれば、「これはちゃんと動いている取組なのだ」と分かりやすくなるのではないか。

(事務局)

観光戦略プランからは少し離れる部分もあるかもしれないが、産業振興計画の6つの基本的な考え方の中には、「丸亀ブランドの創出・展開」が大きな柱として位置付けられている。これはセレクション制度ができる以前からの考え方である。

また、地域製品の販路拡大についても、産業振興計画の方向性として記載されている。その上位計画を踏まえ、具体的な制度として立ち上がったものについて、施策展開をしていくという整理である。

(西川委員)

私が言いたいのは、途中で新しい取組ができたのであれば、元の計画をきちんと見直せばよいのではないか、という点である。

独立した事業として放置しておいて、時期が来たら計画に入れるという整理ではなく、スタートした段階で「計画変更あり」という形で書いておけばよい。そうすれば、取組自体が宙に浮かず、置き去りにされることもない。

年に2回、3回と会議を開くのであれば、その中で「ここを変更した」「これを追加した」という整理があつた方が分かりやすい。最初の計画に「3年ごとに見直し」と書いてあつたとしても、そこまで待つ必要はないと思う。

これだけ状況が変わっているのに、10年、20年前の計画をそのまま大事に持ち続けるのは現実的ではない。

そういう意味では、基本は大切にしつつも、進行管理の部分は柔軟に動かすべきだと思う。いわゆる、不易流行という考え方で整理できるのではないか。

(事務局)

ご指摘はよく理解している。先ほどのブランドの件も含め、事務局として一度整理し、改めて検討したい。

(馬場委員)

丸亀セレクションの中に、「さぬきの目覚め」、アスパラガスは入っているのか。

(事務局)

入っていない。

(馬場委員)

自分のところではイベント関係でアーティストの送迎をしているが、あるアーティストが食事の際に食べて美味しかったということで、「さぬきの目覚めを食べたい」と言われたことがあった。

たまたま従業員の知り合いが作っていたので、お土産として渡したところ、大変喜ばれた。さぬきの目覚めは丸亀市内でもあちこちで作られているし、東京の方だとなかなか食べる機会がなく、買って帰るといふ形になる。実際に非常に美味しかったと言われたので、こうしたものも取り入れていった方が良いのではないかと思う。女性のアーティストだったが、特に評価が高かった。

(西川委員)

丸亀にしかないもの、あるいは丸亀らしいものは、まだ結構あるのではないかと思う。それを掘り起こしていくのも、ブランド部会の役割の一つではないか。

(藤井委員)

現在は申請主義なので、今後推薦にしてもよいのではないかと思う。

(西川委員)

市の方から「これはどうか」「ノミネートのこれは良いのではないか」と声をかけていく形があっても良いと思う。申請を待つだけでなく、こちらから攻めていく姿勢があってもよいのではないか。

(藤井委員)

現在、認定は17件あるが、「さぬきの目覚め」は含まれていない。

(筒井委員)

例えば「さぬきの目覚め」という品種は、名称は香川独自だが、栽培自体は県外でも可能である。そのため、「さぬきの目覚め」という名前が通用するのは、基本的にさぬきである。東京などで販売する際には、認定品であることが大きな強みになる。

(小山部会長)

和歌山ラーメンや宇治茶のように、特定の地域で作られたものをその名称で認める例もある。さぬきの目覚めも、そうした位置付けになれば非常に強い。

このように、地域ブランドを育てていく視点も重要だと思う。

(筒井委員)

20 ページ 戦略方針 1 の「滞在型・回遊型観光の推進」、1-4 の城泊事業の推進について「また、瀬戸内クルージングや和菓子づくりなどの体験オプションプログラムを～」の一文について

城泊事業で生まれたものを一般向けにも展開した、という整理なのか。なぜここに入れているのか。それであれば、逆に別の項目を立てて、「城泊事業で生まれたものを一般体験として提供する」という整理にした方が良いのではないかと感じた。特に観光客向けとしては、その方が分かりやすい。城泊事業の中に含めてしまうと、市民ですら「どうなっているのか分からない」「人が来ているのか」といった声や噂が多い。実際、城に来た観光客からも「あんな所を整備しても、宿泊されるのか」と言われるような状況である。

その中で、付け足しのように入れられている印象が強い。もし入れるのであれば、別項目を設け、滞在型とは切り分けた形で整理した方が良いのではないかと感じた。

(事務局)

見方によっては「1-7 体験コンテンツの高付加価値化」に位置付けることもできると思うが、事務局としては、城泊事業の基本部分とオプションが相乗効果で高め合う形を目指したいという考えから、本項目に整理している。

ただし、この点は整理の考え方によるところもあり、「1-6 新たな体験コンテンツの開発」にもつながるほか、「高付加価値化」にも関係するため、城泊の担当部署と相談の上で、現時点では本項目に位置付けた。

また、城泊は一泊 120 万円以上というインパクトの大きい事業であり、話題性が先行しやすいことは理解している。事務局として一定の危機感を持っているが、城だけで完結させるのではなく、丸亀の魅力として「瀬戸内クルージング」等も含めて一体で売り出したいという意図がある。伝わりにくい面はあるかもしれないが、その点を踏まえて本項目に整理している。

(筒井委員)

意図は理解したが、この話を知らない方に伝わるかどうかは気になる。城泊は、開始以来どの程度の実績があるのか。

(事務局)

実施が完了した案件は 2 件である。現在、商談中の案件が少しずつ増えている。ほかの地域でも軌道に乗るまでに 2 年程度を要したと聞いており、事務局としても焦りはあるが、結果を出すために様々な検討をしている。

(筒井委員)

狙いは良いと思うが、市民からは税金の使い方について意見が出てくると思うので、その点は心配である。

(事務局)

ご指摘のとおり様々な意見がある。価値を維持したいという考えが前提にあり、安売りもしにくい。決して無策で進めているわけではないが、一定の辛抱が必要な時期に入っていると認識している。

本日のご意見を踏まえると、事務局側の見せ方にも課題があると思うため、改善を図りつつ、方向性としては現状の記載のまま進めたい。

(筒井委員)

市民から聞かれた際は、今の説明のとおりお伝えする。ただ、理解されない方がいる可能性があることは意見としてあることをご理解いただきたい。

(小山部会長)

戦略方針3について確認したい。23 ページに姉妹都市の名称が記載されているが、並び順は協定を締結した順番なのか。

(事務局)

国内と国外で分けており、その区分の中で並べている。

(小山部会長)

昨今の情勢もある。外交通商は優先順位を意識する分野でもあるので、優先順位に関する考え方を記載してもよいのではないかと思ったが、どうか。

(事務局)

優先順位を明確に記載するのは難しいと考える。

(杉尾委員)

たしか、交流都市と姉妹都市などで表現も分かれていたのではないか。

(事務局)

区分は分かれており、例えば京極町は親子都市という表現を用いている。

例えば七尾市は、姉妹都市ではなく友好都市である。名称に特別な意味があるというよ

り、その時点で使用していた呼称を踏襲している面が大きい。6団体を並べているが、交流の深さに差があるのは事実である。一方で、それをもって順位付けをするのは言いにくいところがある。

(小山部会長)

例えば交流回数など、説明がつく指標に合わせて並び替えることは検討してもよいと思う。その上で交流を深め、物産の相互販売等につなげていくことも、観光振興に資するのではないか。

また、近年は地震等の災害もあり、七尾市のような地域との連携や、特産品を丸亀で販売する取組なども考えられる。そうした観点での「指標による整理」は一案だと思う。ただ、行政として難しいという点も理解しているので、現状のままでよいと思う。

(事務局)

補足すると、比較的交流が新しい京極町は、提携都市が丸亀市のみであることもあり、相互交流の回数が最も多い。七尾市も交流が多い都市ではある。並びについて問われた際に、説明がつく順番にしておきたいというのが事務局の考えである。

(小山部会長)

気づけば2時間経過している。本日意見を出し切っていただきたい。今後は、来週に庁内委員会、2月上旬にパブリック・コメント、3月に最終会議という流れである。

(西川委員)

第7章の推進体制を移動することについて検討してもらえるのか。

(事務局)

冒頭で説明したとおり、本計画では、まず過去の振り返りを行い、第2章において将来に向けた視点にも触れている。一方で、一部表現が分かりづらいのではないかという意見も出ているが、第4章からは現状を整理する構成としている。

第4章において現状と前回計画の振り返りを踏まえた後、15ページ以降から「本計画は何を目指すのか」という内容が展開される構成である。このため、事務局としては、第7章の推進体制については第6章の後ろに配置するのが望ましいと考えている。

他の計画においても、推進体制は後段に置かれるケースが多いと認識しているが、この点について、委員の皆様の意見を伺いたい。

(西川委員)

まち全体として推進する体制を先に示さないままプランが立つのかという点から、もう少し前に持ってきた方がよいのではないかと思います。

(事務局)

一度、事務局内で協議したい。協議結果としてご期待に沿えない可能性もあるが、預からせていただきたい。

(西川委員)

それで結構である。

(事務局)

先程の説明と繰り返しになるが、事務局としては前段を踏まえた上で、今後の方針をまとめるのが第6章・第7章であるという考えのもと、このような構成となったことはご理解いただきたい。

(小山部会長)

他に意見はないか。

(筒井委員)

最後、27 ページ DMO について伺いたい。DMO 懇談会に出席しているが、方向性や何のためにやっているのかが分からない状態である。そんななかでも次期プランにはDMOの記載があるが、観光協会側にもしっかりした方向性はあるのか。現状とのギャップが大きいので気になっている。

(事務局)

ご指摘の趣旨は理解している。現状は理想と離れている部分があるが、計画には今後目指すべき方向性を記載している段階であり、課題であるという認識である。

3. その他

(事務局)

今後のスケジュールについて説明。パブリック・コメント実施後、3月10日14時から最終の第3回会議を実施予定。

4. 閉会

午後3時40分閉会

(以上)